



全国棚田(千枚田)連絡協議会

# 棚田ライタラス

第58号 2011.7.20

(年3回発行)

発行／全国棚田(千枚田)連絡協議会

編集／ふるきやらネットワーク

〒184-0004 東京都小金井市本町6-5-3チーム石塚内

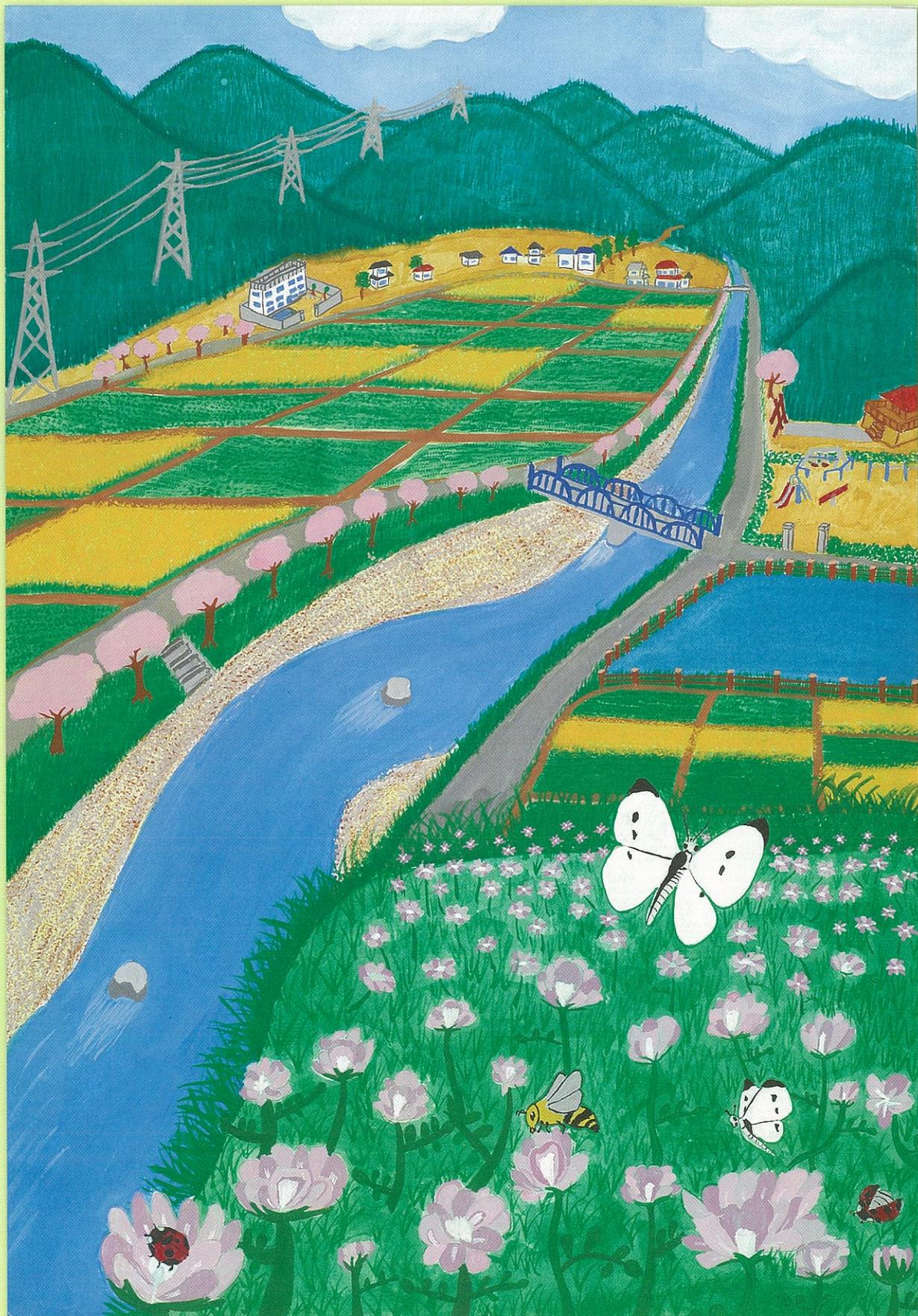
TEL:042-386-8355 / FAX:042-385-1180

<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>

## 特集・大震災

この度の東日本大震災、長野県北部地震及び福島原発事故で被災されたみなさまに心よりお見舞い申し上げます。お亡くなりになられた方のご冥福をお祈りするとともに、明日への復興を目指し、ともに歩んでまいりたいと思います。

「虫たちも動き出した春の田んぼ」橋本ひかり 5年 福島県浪江町立浪江小学校(2009年「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展 全国水土里ネット・都道府県水土里ネット主催 入選作品)



# 震災と農地、復興に向けて ～中山間地域・長野県栄村の今～

信州大学名誉教授 木村 和弘



大きな亀裂が田面を走る (4月20日)

雪が消えて見えてきた被害・道路の崩壊 (4月11日)

## 地震の発生と栄村

3月11日の未曾有の東日本大震災に続いて、12日早朝に震度6強の地震が長野県北部を襲った。この長野県北部地震では、震源に近い栄村を中心に新潟県十日町市、津南町などで被害が生じた。

栄村は、日本でも有数の豪雪山村地域である。震災当時、村はまだ雪の中。その中で倒壊した家屋や倉庫等、建物の被害が目立つた。棚田は2m以上の雪に埋もれていた。また大規模な土石流が生じて千曲川支川の中条川上流を埋めた。土石流は村の施設のすぐそばまで達し、下流集落に危険が迫つた。全村民の8割に当たる約1800人が避難し、避難所生活となつたのである。

地震から3ヶ月経過し、倒壊した家の片付けが進む一方で、未だ手を付けられない損壊家屋も多い。被害の多かつた集落では、家屋の片付けが進んだ結果、やけに集落の中に空き地が目立つようになつた。農地を見れば、例年通り苗が植えられた区画がある一方で、全く作付けられない区画がそこかしこに見られる。畦畔の法面は雑草に覆われ始め、まだ復旧も行われない崩壊地や亀裂を覆い隠し始めている。

## 農地被害 雪が消えて見えてきた

地震発生時、集落内の道路、住宅周辺は除雪がされていたが、農地への道は雪で閉ざされていた。3月下旬になり、やつ

と農地に出かけることができた。雪の上に無数のクラックが走り、雪面が波打つて、雪の下の田面はいかばかりかと思わずにはいられなかつた。4月になつて雪解けが進んで、田んぼの土手や田面が現れてきた。そこに見えたのは、大きな亀裂、田面の沈下、畦畔や法面の崩壊だつた。しかし、山の上のため池、用水路、農道は、まだ数mの雪の下であつた。

5月になると水田の雪もほとんど消えた。被害の全貌はわからないものの「稻作りだけは」との思いで、各集落農家総出の苗代作りが始まつた。雪解けが例年よりも遅く、農地の被害もつかめない中の育苗作業であつた。

## 農家の被害

栄村は集落の農家の縛が強い。生産や生活を支える共同作業や共同施設も多い。こうした共同施設も被害を受けた。個人の住宅、農機具庫・納屋、農業用各種機械、墓地、そして共同施設としての公民館・集会所、社寺、さらに農地が被災したのである。

被害は、往々にして、住宅の被害、公民館の被害、農地の被害など個別に語られる。しかし、農家の被害は重複している。各農家は、住宅だけでなく、共同の公民館等の施設も復旧しなければならない。水田の被害復旧でも、個人で復旧する区画、共同で集落単位で復旧する水路・農道、ため池、これらが全て復旧されて初めて水田耕作が再開できるのである。

## 農地の整備と被害

田面の沈下・亀裂（4月20日）

栄村の農地の多くは棚田である。かつては400ha近くの水田が大小240の圃地に分かれていた（1980年）。特に千曲川右岸の山腹には、戦後開拓によって築造されたため池・野々海池を水源に、急傾斜地に棚田が拓かれた。これらの圃地中には耕作放棄された区画もあるが、少しでも耕作条件をよくしようと村独自の「田直し事業」が行われてきた。

道路、ため池でも生じた。区画には、大

小の亀裂、田面や畦畔の隆起・沈下・畦畔法面の崩壊、土砂流入、さらには液状化による噴砂など様々な被害が生じ、これらが1枚の区画の中に複合的に生じている。そのため、個々の被害対応ではなく、区画単位、圃地単位の総合的な対応が必要になっている。

### 「目に見える被害」「目に見えない被害」

筆者は、今まで阪神・淡路大震災や中越

大震災の復旧・復興の調査を行ってきた。

そこからわかった棚田・ため池の被害に

は、「目に見える被害」と「目に見えな

い被害」があることだ。「目に見える被

害」は、畦畔法面の崩壊、亀裂、土砂流

入など目視できる被害である。目視でき

るため、災害復旧事業の対象になる。

一方、「目に見えない被害」は、一見して被害が判らないもので、微細な亀裂の存在による水持ちの悪さ、田面の不均平など、水を張つて初めてわかる被害である。この被害は、災害復旧事業から取り残されることが多かった。

## 集落の取り組み

住宅、農具舎、畜舎、農地等に大きな被害を生じた17戸の小規模集落で、農家の方々と一緒に農地被害の把握と復旧方法を検討している。地域の人達は、1戸も離村せず、農地を減ずることなく集落を持続するには、「まず水田の復旧だ」と復興プロジェクトチームを立ち上げた。農家の方々と一緒に雪解けと同時に

に全区画を見て回り、どの区画でどのような被害が生じているか、克明な記録作りを行っている。当初、自力で復旧しようとした区画でも、多くの被害が見つかり、急遽災害復旧事業の申請をしたり、自分で修復したもののが漏水が生じたり、大きな被害に驚いたりした。

そして、災害復旧事業にするために、農家は自ら石灰水の流し込みによる亀裂の深さの測定、水準測量による田面の不均平の測定等を行っている。集落一丸となつて災害に立ち向かい、復興へと取り組んでいるのである。

## 中山間地域での震災

栄村は典型的な中山間地域。過疎化、高齢化、農林地の荒廃化など、多くの問題が同時多発的に生じている。今まで、これらの問題に村独自の取り組みが行われた。集落の強い絆を基に、実践的住民自治が目指されたのである。この絆は、水田中心の農業生産を通じて得られたものだ。震災によって生産が途絶えたら、この絆も失われ、集落の継続にも大きく影響するだろう。

既に栄村の水田には、耕作放棄地が存在する。震災を契機に耕作放棄の増加が懸念されるのである。今までの震災では、①被災を契機に復旧せず、放棄するところ、②被災しなくとも、これを契機に耕作条件の悪い、遠距離にある区画、機械作業に適さない形態の区画等が放棄された。災害復旧事業が行わなくても、震災以前の状況には戻らず、不作付け地や耕作

放棄地が増加したのである。栄村では、こうした震災後の不作付けや耕作放棄地が多発しないための方策が求められるのである。

## 農地の復旧・復興、そして村全体のビジョン

東北地域の未曽有の被害とともに異なり、また栄村村内においても被害の程度は異なっている。それらの地域の違いをふまえたきめ細かな対策が求められている。

農地の復旧は、震災前の状況に復旧す

るだけでなく、少しでも使い勝手のよい区画、即ち機械利用の可能な、安全で維持管理の容易な区画への整備が求められる。これは復旧を超えて復興である。

（2011・6・22記）



## 福島県いわき市の米屋から

～生まれてはじめて、  
桜の花が目に入らなかった～



福島県いわき市小名浜  
株式会社相馬屋  
代表取締役

佐藤 守利

(全国棚田(千枚田)連絡協議会個人正会員)

▲3・11福島県いわき市、震度6▽

3月11日、14時46分、マグニチュード9・0の巨大地震が発生した。いわき市は震度6。今まで経験したことのない大きな揺れが、長い時間続いた。玄米を保管する低温倉庫の内では、1.5t（30kg×50袋）単位の玄米をのせてあるラックという金属の棚がアメのように折れ曲がり、4万袋の玄米が崩れ落ちた。1200tの下敷きになった者がいなかつことが不幸中の幸いであった。

配送に出ている5名とは連絡が取れない。社内にいた15名の従業員を駐車場に集めた。30分後に「津波が来る」という情報が入った。海から2km離れているが、1人を近くの川を監視するよう指示した。雪も降ってきた。

30分はアッという間だった。津波が川を逆流して昇ってきた。船まで押し流された。ここは津波の被害はまぬがれた。だが、津波は8回ほど来て、3回目の波で命を落とした人が多いと聞いた。

家に残した家族と連絡が取れず、泣き出す社員も出てきたので、全員を帰宅させた。

翌12日、15時36分、東京電力福島第一原発1号機水素爆発が起きた。翌13日の日曜日は定休日であったが、倉庫の復旧作業のため、社員13名が出社した。スーパーもコンビニも閉店しているため、不安からか人々が次々と店に押し寄せた。通常の10倍以上の来客である。水道が出た。

ないなか、皆、泥だらけで働いた。

翌14日の3号機の水素爆発で、いよいよ緊迫した心理状態の人が増えた。関東や北陸へ自主避難した社員が数名。連絡なしで避難した社員も数名。行政からは何の指示もなく、皆不安のなか、デマも流れた。海に流された車からガソリンを抜く人々。コンビニやATMから現金を奪う人々。昭和33年生まれの私が学生時代に聞いた関東大震災のときと同じ風景がそこには、あつた。

残された社員で、精米と配達、店の営業を続けた。病院や老人ホームへの米の納品もあり、休むわけにも、逃げるわけにもいかないのだ。

相馬屋のみなさん。  
写真1列目中央が、佐藤守利さん。6月29日撮影



### △届けられた支援物資に涙して▽

地震発生から4日後、福井県の米卸会社ライズの樋田社長から軽油2000ℓ、飲料水40000ℓとます寿司が支援物資として届いた。断水が続き、ガソリンスタンドが閉店しているなかのことだ。嬉しかった。社員皆で感謝の涙を流しながら、ます寿司を食べた。

3月22日にヤマト運輸が「営業所止め」で再開した。県外のお客様へも、な

んとか納品できると思ったが、すでに風評被害が拡がっていた。露骨に受け取りを拒否する量販店もあった。輸出していたアメリカと台湾からは、強く拒否され

た。

ヤマト運輸の営業所には、全国の同業者や学生時代の友人から、たくさんの支援物資が届いた。ガソリンを20ℓの赤缶に入れ、200ℓも長野県から寝ずに届けてくれた人もいた。

感謝で、その都度、皆で泣いた。

### △4・11 再び震度6▽

取引先へは、同位体研究所に依頼した

放射性ヨウ素131とセシウム134・137の検査結果を提出し、冷静な判断を求めた。

4月11日夕方、ま

た震度6の地震に襲われた。震源地はいわき市だった。

やっと復旧が一段落した倉庫の玄米がまた、崩れてしまつた。停電と断水のなか、なすすべもなく、途方に暮れた。

3月11日の津波で亡くなったり、行方不明の方がいわき市内だけで300人を

越えるのに、この地震でも土砂崩れで亡くなる人があった。

桜の花が「目に入らなかつた」のは、生まれてはじめてのことだつた。

「値引きせよ!」「精米工場を西日本に移転せよ!」「相馬屋とは原発を連想するから社名を変更せよ!」「1年間死んでくれ!」等々、長年取り引きして信頼していた人たちの口から聞くのは、悲しかつた。

市内の篤農家で組織する「いわきアグリ研究会」の33軒は、すべて平年どおり田植えを終えた。福島県からの許可が遅れ、皆不安だった。



震災から3ヶ月が過ぎ、連日、余震が日に何度も続き、原発事故収束もまだ見えない。若い社員が4名、いわきを捨てて県外に引っ越しため、退職した。

ライフラインが復旧した今、困っていることは2つ。

①3・11で壊れた22年度の玄米が混ざってしまったこと。赤米・黒米・有機米・ミルキークイーン・新潟の棚田米コシヒカリなどが混ざってしまった。33tにのぼる。

②今秋、収穫される福島県産の特別栽培や有機米が風評被害にあつた場合、他県の特別栽培や有機のミルキークイーンやコシヒカリの生産者をどうやってたずねあてたら良いだろうか。



後ろを振り返らず、まっすぐ前を見て一歩、一歩、歩いていきたい。

# 新潟県十日町市の被害から～日本の棚田百選の棚田も崩れて～

十日町市 松代支所 農林建設課 農業振興係長 市川 健司

## 松代・清水の棚田

清水集落は、十日町市の北西部に位置し、北に柏崎市と接している。標高は400mほどで、稜線上にわずかに残る平地に集落があり、山の斜面に切り開かれた農地が点在している。

4月19日のまだ残雪の残る棚田に大規模な地滑りが発生しているのが確認された。その当時、大地は雪に覆われており被害の全容は不明であったが、雪解けと共にその規模は長さ約500m、幅約100mにもなる大規模なことが判明した。地すべりにより被災した水田は県道から

等高線にそつて細長く横たわって見える美しい棚田の風景を醸し出していた。

この地区の水田面積は約3.2ha、そこで耕作する農家は6戸である。このうち、地すべりにより流出等の被害を受けた水田は約1.6haで、棚田の風景の中心となる部分がすべて流出してしまっている。

一方、直接の被害は免れたが、市道や農道が被災したことにより通作が出来ない農地が約1.6haあり、農家からは一刻も早い道路の復旧が望まれていた。

このため、市では地区の地権者の協力を得て少しでも作付が可能となるよう応急仮設道路を新たに計画した。田植えの期限が近付いている中で2戸の農家が間にはねば作付したいと仮設道路の完成を待っていた。地すべり地を迂回する形で進められた仮設道路の建設が漸く6月4日に完成し、5日から早速一部で田植えが始まっている。

当地区は、地すべりの規模は極めて大きいものの、法の網が掛っておらず、対応に苦慮したが、県と連携し地すべり指定に向け国と協議を進めている。地すべり指定により緊急地すべり対策工事を実施し、その後農地災害復旧を図りたいと考えている。これらの事業を通して、来年再び清水の美しい棚田が復活することを地域ともども願っている。

## 松之山・留守原の棚田

留守原の棚田は十日町市の南西部に位置し、津南町との境界近くにある。松之山天水島集落より国道405号線を津南町方面に向かってトンネルを抜けると間もなく道路左下に見えてくる。片隅に併

む茅葺の小さな農作業小屋がシンボルとなり、毎年多くの写真家が訪れている棚田である。

まだ雪深い4月の初め、地元の住民が地震の後の様子を見に現地を訪れたところ国道上部から地すべりらしきものが確認され、近くに多くの杉の木が倒れていたとの報告があった。当時はまだ多くの積雪があり詳細は不明であったが、雪解

けと共に現地確認すると、棚田上部を通る国道405号線を含め長さ約100m、幅約30mに渡って地すべりが発生し、棚田の中央部を土砂が流れていった。これに伴い農道、水路も寸断され耕作できる状態ではなかった。

留守原の棚田は、面積約0.7ha、田の枚数は13枚ほどの小さなものである。この内8枚、0.4haが流出や土砂の流入、畦畔の崩落等により直接の被害を受けた。被災を免れた農地についても農道、水路の流出等により今年の作付を諦めざるを得ない状況であった。

この地域一帯は、林野庁の地すべり指定地となつており、県が実施する地すべり調査の結果を受けて関係者と協議し、原形に近い形で復旧計画を進めていく考えである。



この棚田は、これまで高齢の農家が耕作してきたが、今では市の農業公社が地元の温泉組合と共に棚田を、農作業を通して都市住民との交流を深める場所として活用しており、これまで田植えや稲刈り体験に多くの人が訪れ、谷間に明るい歓声が響き渡っていた。

地すべりにより被災した農地の復旧を早期に完成させ、再び多くの人々がにぎわう姿が再現されるよう地元の人々から強い要望が寄せられている。

# 棚田農業は地域の生業である

中越防災フロンティア副理事長

青木 勝

東北大震災の余りにも大きな被害に、6年余が経過した中越大震災以降の山古志の事例が本当に参考になりうるものか、はなはだ心もとないところだが、山の暮らしの再生を目指した山古志の復興経過を「棚田」と「農業」を語ることで、何らかの参考にできればありがたいと思う。

「帰ろう 山古志へ」という合言葉は、山古志で暮らしたいと言う住民の願いで、あつた。壊滅した山古志がどういう復旧・復興の姿を見せるかによって帰る人

と帰らない人、帰りたくても帰れない人が出てくることは当然であった。

出来るだけ大勢の人の希望をかなえるために私たちが掲げた復興への目標は「山の暮らしの再生」であった。数百年あるいは数千年にわたり、維持されてきた山古志の暮らしをもう一度再生するための試みである。そこで議論されたことは、山古志の暮らしとはどういうものか。その暮らし方に現代的な意味はあるのか、ということであつた。

山古志に最も多くの人たちが暮らしていたのは、昭和30年代である。その後の経済構造の変化等によって、過疎化・高齢化が進み、生活の利便性向上の反面、昔ながらの生活は変わらざるを得なかつた。その最たるものは、棚田を中心とした農業の状況である。

地形的、自然的な条件から生産性が低く、多大な労力を要しながら規模拡大が困難な棚田経営が地域の経済生活における役割も減少せざるを得なかつた。だからといって、棚田が山古志の暮らしに必要なくなつた訳ではない。生産性、効率性だけではない「山で暮らす」暮らし方の中で欠くべからざる資源としての役割はさらに増していくと考えられるのである。

「山の暮らし」とは生活を取り巻く全ての条件を活用し、生活資源として生かすところにある。それは、棚田あるいは

錦鯉養鯉池であり、段々畑であり、山の木々であり、または山菜であり、あるいは出稼ぎ、年金、近年では通勤による現金

収入も含めたトータルな暮らし方である。

国民の7割近くがサラリーマンであり、生活の全てを給料で賄うことが当たり前になつた現代では、この伝統的な「山の暮らし」は原則を外れたものと映るかもしれない。はたして中山間地域の棚田は農地なのか、棚田での稲作りは農業なのか。私たちはそれを単なる「農業」ではなく、山で暮らすための「生業」であると位置付けた。

山で暮らす人々は、職業として「棚田」を維持しているのではない。そこで暮らすために、生きるために「農」を「林」を守るのだ。「棚田」のダム機能を評価する声がある。文化財としての価値を認められることがある。しかしそれは「理屈」。山で田を耕し、「生業」を行う人たちにその気負いは無い。当たり前のように野良に出て、当たり前のよう収穫を喜ぶ。

今、山古志には震災前の7割の人たちが帰つて、以前にも増して豊かに生活している。人口が減つたこと、あるいは高齢化が進んだことによる地域活力の低下はほとんど見えない。いま生きている人たちが安心して暮らせる「生業」が維持されたことが中山間地域の存続に大きな役割を果たしたものと考えている。

ミニューとして「手作り田直し支援事業」を作ることだつた。

先人たちが人力で整備した「棚田」を現代の「手」である重機を使って復旧する。技術基準は地域の智慧。崩落した「棚田」を簡易な設計と見込みを基に、重機を使って均してゆく。

重機代と材料費の4分の3を助成することによって、早く、安く復旧することが可能となつた。

大規模な地すべりを起こした地域の他は、この事業によって速やかな復旧が図れたのだ。



山で暮らす人々は、職業として「棚田」を維持しているのではない。そこで暮らすために、生きるために「農」を「林」を守るのだ。「棚田」のダム機能を評価する声がある。文化財としての価値を認められることがある。しかしそれは「理屈」。山で田を耕し、「生業」を行う人たちにその気負いは無い。当たり前のように野良に出て、当たり前のよう収穫を喜ぶ。

ところが、震災で被災した「棚田」を行なうしかない。「棚田」だからといって、その技術基準はないのだ。先人たちが自然の傾斜地を上手く使って形成した棚田も、安全基準も工法も通常の農地復旧で行なうしかないのだ。

そこで提案したのが、復興基金事業である。そこで提案したのが、復興基金事業である。



アルパカは震災後アメリカから送られたもの。  
集落のお年寄りが飼育している

# 新しく自治体会員が増えました



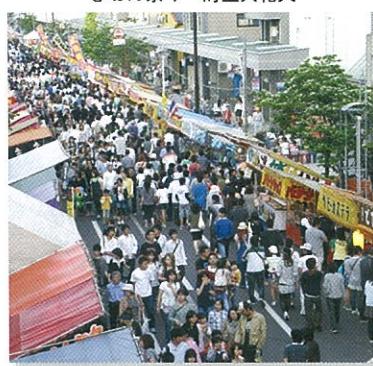
花坂の棚田



朝の高柳町の美しさは格別



きおん祭り 海上大花火



この度の東日本大震災の被害にあわれた方、その後の福島原発の事故により避難されておられる方々に心よりお見舞い申し上げます。

柏崎市は、新潟県の中央部に中間に位置し、海水浴でにぎわう海岸と二階節で有名な米山、長岡市との境の八石山、南の黒姫山に囲まれた人口約9万人の都市で、世界一の原子力発電所が立地する町です。

中世は、北前船の寄港地として栄え、近代は油田の発見により石油産業が日本の近代化を支え、その隆盛により機械工業が伝統的に盛んな町でもあります。

2級河川鯖石川と鶴川の中・下流域は平坦で、肥沃な大地が広がっていますが、上流部・山裾の地域は、急峻な地形と多く重い雪に生産や生活が多くの制約を受けているところです。

近年、果樹や野菜の園芸が取り組まれていますが、大部分が水田単作で、兼業農家が多く、米が農業生産額の大部分を占めています。耕地面積6548ha、

うち水田5206ha(80%)。

高柳町地域は、平成17年柏崎市に合併し、市の南部にあり特に降雪が多く地理条件が劣悪な地域で、過疎化・高齢化が著しく、存続が危ぶまれる集落がいくつもある地域です。

海から隆起したとされるこの地域は、粘土質で固結度が低く、全て地すべり地帯のようなもので、毎年の大雪や融雪・大雨のたびに大きな災害をこうむつて来たところです。

耕地は山の斜面や河川沿いに散在し、ほぼ全域が中山間地域等直接支払制度の対象となるようなどころで、まとまっている部分が美しい棚田となつており、うち3箇所が平成11年に、日本の棚田百選に認定されています。

私たち自慢の棚田は、先人が崩れるところがあると、内側に畦を築き直し、崩土を均し、形を変えながらも水田として活かしてきました苦労のたまものなのです。

そして現在、機械化は進んだといかながらも黙々と田んぼや畑と向かい合い、守り続けていきます。頭の下がる想いです。

平成16年10月の中越地震、平成19年7月の中越沖地震、そして今年3月の長野県北部地震と大きな震災が発生し、すぐ隣の地域まで大きな被害が及びましたが、幸いにもこの地域では大きな被害は発生せず、大変ありがとうございました。

過疎化・高齢化、米価の下落、耕地は山の斜面や河川沿いに散在し、ほぼ全域が中山間地域等直接支払制度の対象となるようなどころで、まとまっている部分が美しい棚田となつており、うち3箇所が平成11年に、日本の棚田百選に認定されています。

私たち自慢の棚田は、先人が崩れるところがあると、内側に畦を築き直し、崩土を均し、形を変えながらも水田として活かしてきました苦労のたまものなのです。

そして現在、機械化は進んだといかながらも黙々と田んぼや畑と向かい合い、守り続けていきます。頭の下がる想いです。

エネルギー多消費生活の見直し、食糧危機の訪れ等々中山間地域が必要とされる日が来ると一部では言われていますが、それまでこの地域が維持できるのでしょうか。

そんなことを愚痴りながら、何か地域の人方が喜ぶ明るい話題が無いか、探し続ける高柳町事務所担当者です。

(柏崎市 高柳町事務所地域振興課  
産業振興係長 中村 圭希)

# 「棚田石積み実践指導」を開催

うきは市石垣保存会会長  
関 健児(個人賛助会員)

ライステラス57号でつづら(葛籠)棚田を救った「つづら棚田を守る会」の活動報告が掲載されました。“うきはつづら棚田”から第2弾として、「つづら棚田石積み」の「文化遺産」を継承する活動を報告させていただきます。

平成23年3月2日、うきは市新川の「つづら棚田」で、うきは市石垣保存会実行委員会(佐々木高信前会長・関健児会長)が「棚田石積み実践指導」を開催しました。これは、棚田の一角に市が公衆トイレを設置

するために行われる、その脇の石積み工事にあわせて実施したものです。

地元の方々や九州大学院生、地元建設業者ら約30人が参加しました。

うきは市石垣保存会は、うきは市・八女市(旧浮羽町・旧星野村)が共同開催しました第6回全国棚田サミットを開催するにあたり、棚田を含む石垣を地域の「文化遺産」ととらえて、1997年に発足しました。市内に点在する棚田の石垣の形態や工法などを調査してきた会です。

「棚田石積み実践指導」は、保存会のメンバーのなかで長年石工をされている松岡隆成さん(74)など4人の石工さんが講師になり、床掘り、根石入れなど石積みを現存する石積みの形態に沿って、指導し積み上げました。

石積みをした規模は、高さ約2m、幅8m、石積みの石は約130個。作業は、床掘り、ちょうど張り、根石入れ、石積みと裏ぐり入れの順に行われました。3月8日の西日本新聞にも掲載され、そこには「市教委の委

託で2008年度から一帯(筆者注:うきは市新川、田籠校区)の建築物や景観の調査をしてい

る同大学人間環境学研究院(大

学院)

の天満類子さんは、『棚

田保存には、(石積みなど)技

法の継承が大切であることを実

感した』と話していたとも書

かれてありました。

あと、懇親会で土木業者、市

民、他市町村の方々に、同会への

入会を呼びかけました。この記

事が載るころには、参加された

方々と総会も終わり、新しい事

業に取り組んでいると思います。

託で2008年度から一帯(筆者注:うきは市新川、田籠校区)の建築物や景観の調査をしてい

る同大学人間環境学研究院(大

学院)

の天満類子さんは、『棚

田保存には、(石積みなど)技

法の継承が大切であることを実

感した』と話していたとも書

かれてありました。

あと、懇親会で土木業者、市

民、他市町村の方々に、同会への

入会を呼びかけました。この記

事が載るころには、参加された

方々と総会も終わり、新しい事

業に取り組んでいると思います。



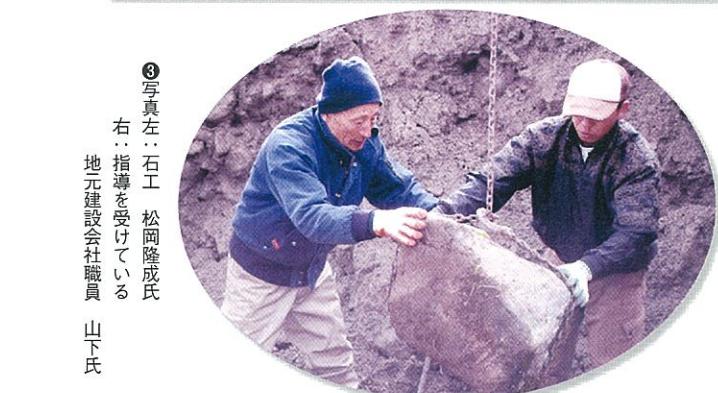
⑤完成!



①床掘り(写真中央:筆者)

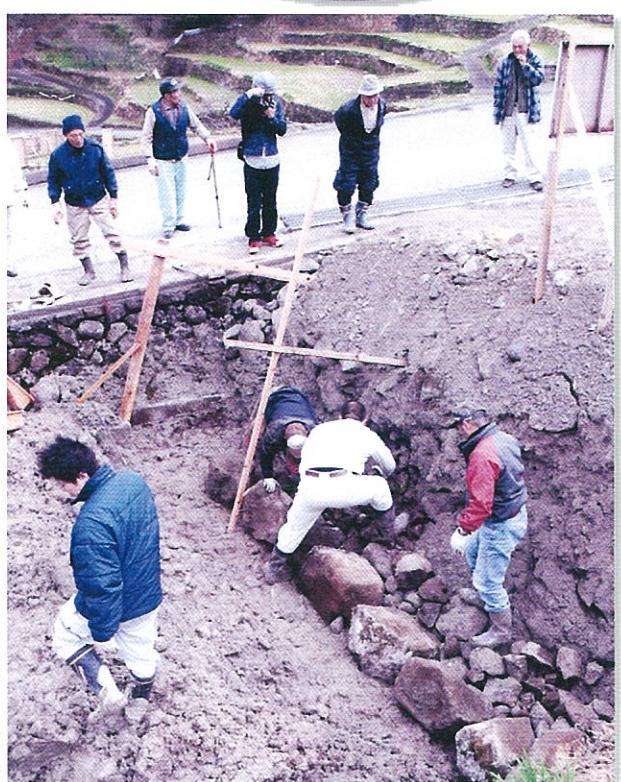


②根石入れ



③写真左:石工 松岡隆成氏  
右:指導を受けている

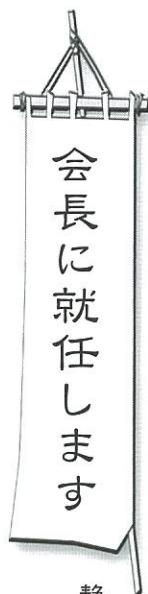
地元建設会社職員 山下氏



④裏ぐり入れ作業

# 全国棚田（千枚田）連絡協議会

## 会長が替わります



静岡県松崎町長

齋藤 文彦

平成23年度全国棚田（千枚田）連絡協議会の会長

という大役を仰せつかりました。1年間皆様のご支援、ご協力を賜りながら会の運営に当たつてまいりたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

さて、3月11日に発生した東日本大震災は、死者・行方不明者2万894人（7月11日、警察庁まとめ）、依然として約9万9千人（6月末、内閣府）以上の皆

様が避難生活を強いられ、福島原発事故も重なるなど未曾有の事態となっています。さらには、翌日に発生いたしました長野県北部地震では、当協議

会会員でもあります新潟県十日町市、津南町で被害が出ております。今回の震災に対しまして、お亡くなりになられました方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災されました皆様には心よりお見舞いを申し上げます。

また、今回の震災では、農家や棚田を含む農地にも甚大な被害が出ており、一日も早い復旧、再開を願っております。



新潟県津南町の被害状況

長野県北部地震では、本協議会自治体会員でもある新潟県津南町でも被害があった。石垣の美しさで有名な結束集落石垣田での被害は一部にとどまったが（上写真参照）、長野県栄村と隣接するエリアでは大きな被害が出ている。6月30日現在で、被害総額は25億3192万円。うち田は4億2200万円。畑は3億2700万円。畦畔や路肩にも被害は大きく、また水路やため池などの農業用施設の被害も大きかった。

昨年、10月22日・23日の両日、「棚田が結ぶ、ふるさとの絆～みんなで創

ろう！百笑の里～」をメインテーマに当町で開催されました「第16回全国棚田（千枚田）サミット」には、全国各地から多くの皆様のご参加をいただき、盛会のうちに終了できました。これもひとえに、会員の皆様をはじめ多くの皆様のご支援の賜物と厚く御礼申し上げます。

人口8千人足らずの静岡県で最も小さな町に全国各地からの皆様をお迎えするにあたり、会場や交通、おもてなしなど心配な点もありました。しかし、松崎らしい、心に残るサミットにしようと、保育園、小・中学校、高等

学校、企業、各種団体、ボランティアなど子どもから大人まで、皆が力を合わせた、正に結いの精神、地域の絆が結集された大会が開催でき、誠に嬉しく思っております。棚田見学会では、富士山の勇壮な姿をご覧いただきましたが、非常に感慨深いものがありました。

今年の「第17回全国棚田（千枚田）サミット」は、10月28日・29日の2日

間、「いつきゅうと彩の里」徳島県上勝町での開催となります。上勝町は、

日本で最も美しい村連合に加盟し、葉っぱビジネスやゼロ・ウェイスト宣言

など特色のあるまちづくりを開催しております。重要文化的景観、日本の棚

田百選に選定の「樺原の棚田」をはじめ多くの棚田を有しております。サ

ミットでの情報交換や交流を通じて、棚田の保全活動がより一層推進されることを願っております。

終わりに、当協議会のさらなる発展と会員の皆様のご健勝、ご活躍を祈念いたしますして、会長就任のご挨拶とさせていただきます。

## 会長を退任します

新潟県十日町市長

関口 芳史



昨年、静岡県松崎町で行われました第16回全国棚田（千枚田）サミットでは「棚田が結ぶ、ふるさとの絆～みんなで創ろう！百笑の里～」をテーマに、全国各地から約2200人の棚田保全活動にかかわる皆様が参加し、たいへん有意義なサミットとなりました。これはひとえに斎藤町長様をはじめ、実行委員会関係者の皆様のご尽力のおかげであり、あらためて深く感謝申し上げます。

さて、このたびの東日本大震災・長野県北部地震により被災した皆様に、心からお見舞い申し上げます。

一部報道されたとおり、当市においても、今冬の豪雪災害、そして長野県北部地震と立て続けに激甚災害の指定を受けるなど、大きな被害を受けました。雪解けの遅れに加え、地震による農地や農道、水路などの被害も甚大であり、特に松代地域の清水や、第15回全国棚田（千枚田）サミットの見学地となりました、松の山地域の留原の棚田にも、地震による地すべりが発生し、両地域を含む市内農地36箇所11.2haにわたり、傾斜地を中心に被害を受けました。

被災農地の今後については、農業再開に向けて国県の関係機関と連携し、万全を尽くすとともに、被災農地等の復旧に取り組む農業者の皆様を支援してまいります。

また、山間部を中心に、農業者の高齢化や担い手不足による荒廃農地の増加も懸念されています。実際、昨年度から始まつた第3期中山間地域等直接支払制度の当市の加入対象面積は、一昨年と比べると、約300haも減少しており、継続的な農業生産活動の維持が大きな課題となっています。そのためには、集落間の広域協定や継続的生産活動を担う営農組織の育成などを、さらに進める必要があることはもちろんのこと、同じ農地環境を有する皆様が集うこの全国棚田（千枚田）連絡協議会の連携もより強固なものにし、この美しい日本の棚田を未来に引き継いでいかなければならぬと思っています。最後になりましたが、全国の会員各位、棚田保全にご理解ご協力をいただき、ご支援いただきました農林水産省はじめ国、県関係機関の皆様に心より感謝申し上げ、退任のご挨拶といたします。



# 第17回全国棚田(千枚田)サミットニュース

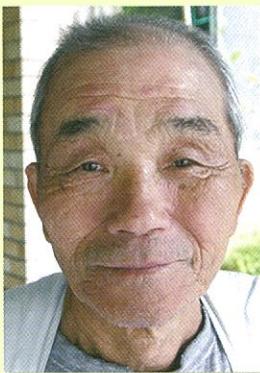
## みんなで待つところけんなん!!

平成23年10月28日(金)～29日(土) 徳島県上勝町で!!

今回のサミットは、「緑の階段 みんなで守ろう 日本の棚田」を開催テーマに掲げ、全国の棚田地域の直面する問題解決や、元気づくりのために開催します。

分科会については、①棚田の保全 ②棚田の価値 ③棚田の活用 ④棚田と酒(徳島大学上勝学舎主催)をテーマに、参加者のみなさまとともに、議論を行いたいと考えています。また、現地案内については、農林水産省の日本の棚田百選・国の重要文化的景観に認定された「樺原地区」、朝日新聞と森林文化協会の「ほんの里100選」に認定された「八重地地区」、環境省のかおり風景100選に選ばれた「田野地区」、都市住民との交流が盛んな天上の楽園との異名を持つ「市宇地区」の4ヶ所(1人1ヶ所の案内)を計画しています。開催規模は500名とさせていただきます。応募者多数の場合には、全国棚田(千枚田)連絡協議会会員さま優先等、実行委員会事務局により、参加人数の調整をさせていただきますので、ご理解とご協力をお願いします。(第17回全国棚田(千枚田)サミット実行委員会)

### やえじ 八重地地区 「ほんの里百選」選定 中内 英夫さん



八重地の棚田は、上勝町の最西端に位置し、水稻を中心として営農が行われてきました。近年は高齢化と後継者不足も相まって、農地の維持管理に苦慮していましたが、国の補助を受け、平成13～14年度にかけ、全国的にも類のない自然の形(原型)を残した圃場整備が施工されました。平成15年度に換地が終了し耕作が可能となり、大型機械の導入と経営の合理化が図られました。

また平成21年度には、八重地地区が「ほんの里100選」に選定され、全国的にも脚光を浴び、棚田の風景に魅了され訪れる人々が後をたたない状況です。

### いちう 市宇地区 マチュピチュのような棚田 柳瀬 武志さん



市宇地区は、標高差がすごい。縦に長い集落です。田んぼも1枚ごとの段差が大きい。ということは、草刈らないかん面積が大きく、道も急で、耕作するのがなかなか大変。

しかし、目の高さに向かいの山の稜線がある。この景色はなんとも言えない、独特のものです。訪れる人のなかには、「マチュピチュ(『空中都市』の異名を持つインカ帝国の遺跡)みたい」という人もあります。

谷の水もごつついきれいなんですよ。集落の中程の「天上の泉」では誰でもその水を飲むことができます。ぜひ一度お越しください。私が待っています。

問い合わせ先：上勝町役場 産業課内

〒771-4501 徳島県勝浦郡上勝町大字福原字下横峯3番地1

電話：0885・46・0111 FAX：0885・46・0323

### 谷崎 勝祥さん 樺原の棚田村代表 全国棚田(千枚田)連絡協議会個人正会員



受け入れをしようと他地域の人たちも出てきて、4つの集落で作業が進んでいる。4つの集落の

上には1439mの高丸山があり、何とか見守ってくれそうだ。

第1回の樺原町サミットの時は、自分の車で自宅5時出発で、徳島新聞の記者さんを誘って3人で行ったが、樺原町へは午前11時に着いていたが、帰路は少し遠く感じたものだ。

樺原は、上勝町で最も標高の高い所にある集落のひとつで、一番水の便が悪く、今年も水が心配されたが、台風1号・2号が雨を運んでくれて、なんとか田になった。樺原は標高700mから450mと坂の棚田で平均100mと面積が小さく、草刈場が多く、作業効率が大変悪い田んぼですが、角から角までよく見てください。



## 澤田 俊明さん

有限会社環境とまちづくり代表・徳島大学客員教授  
全国棚田(千枚田)連絡協議会個人正会員

上勝町での棚田サミットは、1995年に高知県梼原町の第1回サミット以来、四国では2番目の開催です。上勝棚田サミットでは、直面する棚田の課題解決のため4つの分科会が開催されます。実行委員会主催の分科会は「棚田の保全(鳥獣害から棚田を守る)」「棚田の価値(景観、歴史、生業等の価値を学ぶ)」「棚田の活用(資源としての棚田を活用)」の3つ、徳島大学上勝学舎主催として、「棚田と酒(主体的・継続的な棚田保全活動)」が計画されています。

元気いっぱいの上勝町で全国の皆さんとの将来に向けた熱い議論をお待ちしています。



## 森 紗綾香さん

徳島大学 地域創生センター 上勝学舎  
特任助教 博士(工学)  
「棚田と酒」分科会主催

徳島県上勝町の棚田米はとても美味しいお米です。ブナ林のある豊かな山から湧きでる源流水、密やかに流れる谷川の水を使って作られているからです。この棚田米を使った日本酒づくりが地元有志により始まりました。中心となるのは「かみかつ酒づくり隊」。田植え、草刈り、収穫の米作りから、オリジナル日本酒の製造まで、一貫して取り組んでいます。本分科会では、こうした上勝町内の現状、先行事例、酒作りを介した主体的で継続的な棚田保全活動と地域活性化の仕組みについて議論したいと思います。

徳島大学地域創生センター上勝学舎HP:

<http://www.cr.tokushima-u.ac.jp/kamikatsu/>



## 田中 貴代さん

八重地地区在住・農家・アメゴ養殖  
県指定「森の案内人」

40年前から田んぼを池に変えてアメゴ(淡水魚)を養殖しています。年間出荷量は8t・10万匹。今、サミットに向けて、若い人たちと商品化を考えています。また、広葉樹のタネを拾って苗木にするのがライフワーク。10年前、スギやヒノキが育たない上の方のはげ山が気になり県に働きかけたのがはじまり。今は畑で3万本を育成中です。山と棚田は切っても切れない縁。山を守らんと棚田を守れんです。ここはみんながよく見て、よく考えて工夫しています。感じ取ってもらえるはずです。そして高齢化が進むなか、集落をどう維持していくべきか、一緒に考えてもらえるとうれしいですね(談)。



## かし はら 樺原地区

国の重要文化的景観です

## 松下 和照さん

全国棚田(千枚田)  
連絡協議会個人正会員

樺原地区は標高500~680mに位置し、棚田の中に全15戸の民家が点在しています。昔から山からの水を利用し、かつては水車が13基。今は2基を復元しています。そして約200年前(江戸後期)の絵図に樺原の棚田は描かれており、当時と変わらぬ姿のまま、今へとつながっています。集落内の道も当時のまま。この道を「絵図里道」と名付け、歴史的文化財として保全しはじめました。ここは日本の棚田百選のほか、平成22年2月に国の重要文化的景観に認定され、さらに広範囲の指定に向け進めています。歴史ある樺原を見てもらいたいと思います(談)。



## たの の 田野々地区

絶景かな田野々の棚田

## 武市 功さん



山あいの米どころとして古来より受け継がれてきた小さな盆地にある田野々の棚田は、青空と、緑の山々、清流がつくり出す曲線美、生活を支える主要道と棚田、そこに生活する集落のたたずまいが配置よく景観美を引き立てています。

田畠の合間に自生する山茶の葉っぱを伝統の乳酸菌醸酵を経て製造されるお茶が、当地自慢の神田(じでん)茶、この神田茶の里の高台から南西の靈峰龍山を背景に眺める眼下の棚田風景がまさに絶景。爽快な気分とほっと心を和ませてくれる風景の場で、自慢の美味しい神田茶を飲みながらふるさと上勝を心豊かにお楽しみください。

# 伊根と新井の千枚田を愛する会 活動報告

伊根と新井の千枚田を愛する会代表 福満敏博(個人賛助会員)



丹後半島の先端部「舟屋」で有名な伊根町新井地区「新井の千枚田」での都市住民の農作業体験を兼ねた、棚田復田・保全活動が14年目になりました。

現在管理・維持できている面積は約2反、枚数は35枚ですが、最も少なかつた時の2倍以上となっています。海に向かって南東の急斜面にあるこの棚田は、幅が狭く小さい田なので、乗用の耕運機が使えません。田起し、しきかきは特に手間が掛かり、素人には難しい作業なのでほとんど地元にお任せしています。

また、昨年3月には京都府の補助事業で景観に配慮した耕作道が整備され、作業が軽減されました。

復田・保全していくためには管理作業とそれらにかかる費用が必要です。そのため各地で様々な手法での取り組みが行われています。私達の会は、役場、ながら、棚田の保全の必要性を、地元だけでなく都市住民にも働きかけてきました。棚田の管理費用、会の運営経費について、現在公的補助は受けていません。

A・B・Cコースで棚田収穫米5kgとA伊根酒、B伊根鮮魚、C伊根農水産加工品から選んでいただき、収穫後にお渡ししています。また、会員に案内する年間活動は4月山菜摘み(伊根町寺領地区)、5月田植え、7月草刈、9月稻刈りです。

地元と参加者の交流を深めることも大切な目的のひとつなので、準備を含め地区の方々と協力して、できるだけ地元産の食材にこだわって昼食を用意しています。特に千枚田のすぐ下の漁港で当日水揚げされた魚やイカの刺身、塩焼きは大変好評です。そのため、田植え、稻刈りには毎年80~100名ほどの参加があります。これも、会員募集や継続に役立つていると思い

ます。特に最近は若者のグループや家族連れの参加者が増えてるので、そこから会員になっていただけるように働きかけていきたいと考えています。

会の役員(大阪・京都の米穀店主)の主な役割は棚田応援団(年会費会員)の募集です。目標は、1口1万円、100口ですが、これまでの最高は1口、最近は60~65口で推移しています。毎年新たな入会者がありましたが、棚田保全だけの目的では集まらないのが現状です。そのため本筋から外れるかもしませんが、地域の特色を生かした会員特典を用意しています。

会員活動費の助成は、個人会員が関わりを持っている全国各地の棚田保全活動の中から、良質な活動を応援することを目的に、個人会員数に応じた金額を「全国棚田(千枚田)連絡協議会」からいただいています。

今年度の助成については、平成23年度棚田連絡協議会総会(10月28日)にて金額が決定された後、募集いたします。

応募は自薦、他薦を問いません。

助成を受けた個人会員はライステラスに活動報告を投稿していただきます。改めてご案内しますが、奮ってご応募ください。

なお、「徳島県上勝町棚田サミット」では、上勝町にお住まいの個人会員が中心になって、サミット前夜祭(10月27日)に個人会員交流会が企画されています(この企画にも助成が行われています)。

交流会の詳細については、後日主催者から送付されます。

みなさま是非参加され、楽しく語り合いましょう。

## 個人会員活動費助成について

### 個人会員

(個人会員世話人代表 木戸幸子)

ホームページ <http://www.senmaiada.jp>  
棚田があり、漁港があり、海があり、若狭湾に浮かぶ冠島・沓島のある美しい景観がいつも残せるように、地域が元気になるように、頑張っていきた

いと思います。

木戸幸子

# 第17回棚田サミット開催プログラム

時 間		内 容
8：30～9：30	全国棚田（千枚田）連絡協議会総会	
10：00～10：10	上勝町棚田の紹介 ビデオ放映	
10：10～10：50	オープニング・開会式	
10：50～11：05	上勝町の取り組み報告：上勝小学校	
11：05～11：10	上勝町の棚田紹介 谷崎勝祥さん	
11：10～12：00	基調講演：徳島県 飯泉嘉門知事 演題「未来へつなごう！棚田は日本の宝物～農山村（ふるさと）からのメッセージ～」	
12：00～14：00	昼食・分科会会場への移動	
14：00～16：30	分科会 ①棚田の保全「鳥獣害からの棚田を守る」 コーディネーター：奥村栄朗氏 (森林総合研究所四国支所野生動物室担当) ②棚田の価値「景観、歴史、生業、空間等の価値を学ぶ」 コーディネーター：澤田俊明氏(徳島大学客員教授) ③棚田の活用「棚田資源を活用したツーリズム、オーナー制、古民家活用等について学ぶ」 コーディネーター：広瀬敏通氏 (日本エコツーリズムセンター代表理事) ④棚田と酒(徳島大学上勝学舎主催)「酒づくりを介绍了継続的な棚田保全活動を学ぶ」 コーディネーター：山中英生氏(徳島大学教授)	
18：00～19：30	全体交流会	
時 間		内 容
9：00～10：00	現地案内箇所へ移動	
10：00～11：30	現地案内（八重地地区／市宇地区／櫻原地区／田野々地区）	
11：30～13：30	閉会式会場へ移動・昼食	
13：30～13：45	分科会のまとめ コーディネーター：澤田俊明氏	
13：45～14：30	閉会式	

## 「棚田の景観を考える」

情 報

申 し 内 箇 所  
棚田学会事務局  
F A X : 0 4 2 - 3 3 6 - 1 2 9 9  
E-mail : tanadagattukai@yahoo.co.jp

2011年8月7日 (日)  
14時～17時45分  
三越劇場にて(東京日本橋三越6F)

京都大学副学長)を迎える。演題は「重要文化的景観の意義と棚田の景観」。その後、2本の講演のほかパネルディスカッショーンも。

## 編 集 後 記

3月11日に起きた大震災から早くも4ヶ月が過ぎようとしています。にもかかわらず、原発事故はまだ収束を見せず、大きな不安や生活重苦を強いられている人も多いことでしょう。今回D4掲載の、福島県いわき市の個人正会員の佐藤守利さんは被災され、「精神的にまいるなか、原稿が書けなかった」とおっしゃられながら、なんとか原稿を寄せくださいました。何か力になれるることを考え、応援していただきたいものです。

災害も自分たちの手のうちで起こっていることならば、何とかできても、いまは専門家に委ねなければならないことが多いのも現状です。そんななかではありますが、棚田地域は、災害を自分たちの手で乗り越えてきた力強い歴史を持つ地域といえます。そんな棚田から、何か多くの勇気を発信できるのではないかとも期待しています。

石井里津子

## 棚田の保全・中山間地域活性化のための全国組織

### 全国棚田(千枚田)連絡協議会

お申し込み・お問い合わせは協議会事務局

静岡県松崎町 企画観光課

〒410-3696 静岡県賀茂郡松崎町宮内301-1

T E L : 0 5 5 8 - 4 2 - 3 9 6 4

F A X : 0 5 5 8 - 4 2 - 3 1 8 3

協議会 HP:<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>

新しく会員になったみなさま

<団体正会員>

和歌山県農村振興技術連盟 (和歌山県)

平成23年度全国棚田（千枚田）連絡協議会の事務局を務めることになりました。静岡県松崎町です。1年間どうぞよろしくお願いいたします。

昨年10月22日・23日に当町で開催いたしました「第16回全国棚田（千枚田）サミット」には、全国各地よりたくさんの方にお越しいただきました。サミット開催にいたしました。

地域の活性化を目指す「一社一村」の仕組みづくりに力を入れるとともに、地域の担い手として、行事・活動にも積極的に参加しています。また、企業と農村の協働による

棚田サミット以降、分科会での提言を受け、平成23年度から総務省の「地域おこし協力隊」の制度を導入いたしました。現在、都市部の若者たなが、石部地区に入り、棚田での作業をはじめ棚田保全に向けていました。また、企業と農村の協働による

棚田サミット開催に合わせて設立した「棚田百笑くらぶ」の活動を継続してきました。小学生の子どもや保護者を対象に、棚田で農作業や環境学習など年間を通して活動を設定し、棚田を遊びの場として積極的に活用しています。棚田での学習活動も、棚田サミット開催に合わせて設立した「棚田百笑くらぶ」の活動を継続してきました。誠に、有難うございました。



新しく会員になったみなさま

<団体正会員>

和歌山県農村振興技術連盟 (和歌山県)



「おこめをとったよ！」 高橋征那 1年(2009年入選作品)  
宮城県亘理町立高屋小学校



「みんなで田うえをしているよ」 志小田菜月海 2年(2010年入選作品)  
宮城県山元町立中浜小学校

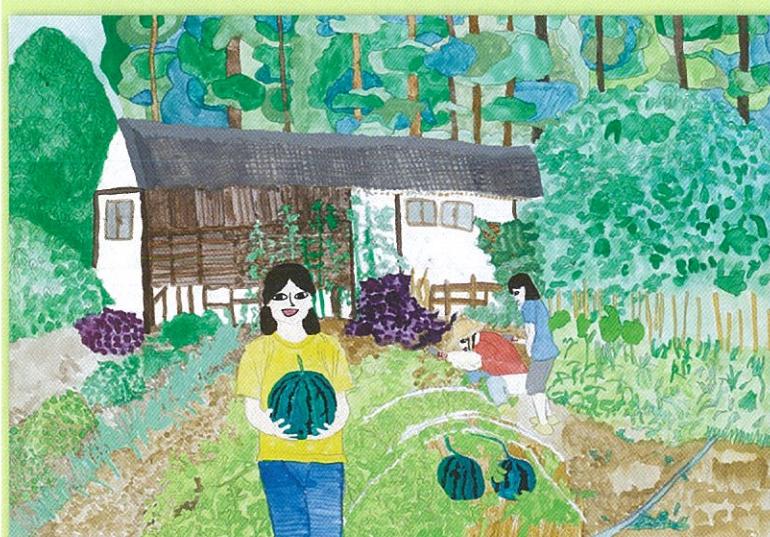


「全校生での田植え」 高橋伸仁 4年(2009年入選作品) 福島県飯館村立飯樋小学校

## 子どもたちの絵から 被災地のふるさとを 想う

2000年からはじまった「ふるさとの田んぼと水」子ども絵画展(全国水土里ネット・都道府県水土里ネット主催)も12回目。昨年までに合計10万点近い、ふるさとの絵が応募されてきました。今回、表紙と裏表紙にと、2009年と2010年の過去2年の入賞入選作品のなかから被災地を描いた作品を探しました。そのうちの6点だけですが、ご紹介します。

子どもたちが描いたふるさとの景観。いまや失われたものもあるかと思うと胸が張り裂けんばかりです。ふるさとを離れざるを得なくなってしまった子どもたちもいることでしょう。この絵から多くを感じ取っていただければと思います。そして、子どもたちの無事を祈るとともに、いかなる困難にあっても絵を描く力、また生き抜く力を持ち続けてほしいと願うばかりです。(子ども絵画展審査員、石井里津子)



「いなかで野菜をたくさんとったよ」 今野帆夏 4年(2010年入選作品)  
福島県双葉町立双葉南小学校



「ほたるとり」 佐々木理絵 6年(2009年入選作品)  
宮城県大崎市立松山小学校 16